

「ワーカーズコープ」寄附講座運動③

ワーカーズコープ寄附講座に関連する特集は今まで4回あり、本号で5回目である。

「沖縄を知る 沖縄から学ぶ ワーカーズコープ」(277号)2015年12月、「共に生きる新しい『学びの共同体』づくり(288号)2016年11月、「『ワーカーズコープ論』寄附講座運動」(299号)2017年10月、「ワーカーズコープ論寄附講座運動②」(310号)2018年9月である。この間、特集として組んだ背景には、寄附講座の学びを定点的に深めるとともに、特に今年度は9大学で開催する広がったために、半年という短いスパンであるが、再度特集化した。

2015年に沖縄大学で始まったワーカーズコープ寄附講座は4年が経過したなかで、改めて寄附講座のあり方や展望を見出す時期に来たと考えている。つまりワーカーズコープ寄附講座1.0が終わり、2.0に向かう戦略が必要である。

戦略を考える前に、寄附講座の歴史を振り返りたい。

寄附講座の発端は、2014年の日本労協連第35回総会ならびに労協センター事業団第29回総代会の第6号議案「学校・会館建設に向けた提言」である。方針として「仕事おこし・まちづくりの担い手を養成する「協同労働塾」(仮称)の設立」のなかに、寄附講座を全国展開していく可能性に触れている。(その他方針として、「保育・介護などの(専門)学校の設立」「ワーカーズコープ立の(小)学校づくり」が挙げられていた)

そしてモデルとして2015年の沖縄大学から始まり、当初から日本社会連帯機構・センター事業団本部とともに、協同総合研究所は大学とのつながりもあることから事務局を担った。2018年度からは開催校が3校から9校に広がるなかで、労協センター事業団の各事業本部や事業所が主体となりはじめ、寄附講座を開催している。事務局を担う主体が多様になり始めるなかで、今後、日本労協連の会員組織ならびに関連組織全体で寄附講座のあり方を共有し、戦略を立てながら開催することが必要であると感じている。

2013年度に学校建設・会館建設プロジェクトが立ち上がり、私もオブザーバーの立場で参加したが、この議論から5年が経ち、既存の学びの場である大学と連携して、9大学で寄附講座を開講してきたことは、大学とワーカーズコープとのつながりを強くした。そして学生が協同労働という新たな労働のあり方に触れるなかで、労働観を大きく揺さぶられたことは、学生の学びの視点からは大きな成果であった。既存の大学との関わりのなか

で、学生の学びを直接捉えられることができた5年間をワーカーズコープ寄附講座1.0と位置づけたい。

ワーカーズコープ寄附講座2.0の戦略を描くために、特集誌面を2部制にした。

第1部は新たに寄附講座を開講した「福島大学」「桃山学院大学」「和歌山大学」「琉球大学」で講座を担った担当教員ならびに事務局にご執筆いただいた。寄附講座がそれぞれの大学の教員とワーカーズコープが話し合いながら、各大学でのオーダーメイドでつくってきたことが、多様な学生の学びを生んでいる。それとともに福島では「Workers被災地に起つ」の応援する会が立ち上がったことや、沖縄キリスト教学院大学は担当の先生の教え子がワーカーズコープに入団すること、桃山学院大学の学生は講座をヒントにビジネスコンテストに応募をするなどの動きが起きている。

第2部は4大学で寄附講座を開催した沖縄で、先生方に集まっていただき、寄附講座の成果・課題と今後の展望について座談会を開催した。「学生の学び」を中心にしながら、学生の労働観がネガティブなものからポジティブに変わったことが寄附講座での大きな成果になっている。またワーカーズコープへの入団をする学生も現れているが、協同労働による仕事おこし、起業まで行くと、なかなか学生にとってはハードルが高く、人材確保のために行うことにすると学生は引いてしまうなど、率直な意見交換を通じて、寄附講座の出口(成果)をどこにおくのかも議論した。別稿では私が中学校で話をしたときの問題意識について記載した。「協同」することの意味を伝えることの難しさを実感し、日常的に「協同すること」の必要性や楽しさを実感する機会が必要であると感じた。その意味で、「協同」の実感が持てる場づくりを通じて、社会や地域を作り変えたいと思う若者をどれだけ増やせるのかが今後の寄附講座では焦点になると感じた。

ワーカーズコープ寄附講座1.0の最大の成果は「協同労働による学生の労働観の変容」であったが、2.0は1.0を深化されて「協同労働による社会づくり・地域づくりの実装化」にしたい。そのためにも、より協同組合や協同を展望する団体の事業・運動の実践と大学とをつなげる寄附講座にしていきたい。そして地域・事業所を単位として、寄附講座で生まれたネットワークを日常的に活かす仕組みが必要であると考えている。

そして寄附講座の起点になった学校建設プロジェクトや本号掲載の座談会にもあったように、学生だけではなく、一般の方々にも門戸を開いた「協同労働を核とする学校づくり(学びの場づくり)」を寄附講座の経験からつくっていこうと考えている。

(協同総合研究所 事務局長 相良 孝雄)

農的デザイン研究所代表

薦谷栄一氏

企業による大学への寄付講座は、ずいぶん広がってきた。企業だけでなく、協同組合系統も寄付講座に力を入れてきている。こうした中で特に注目しておきたいのが、日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会に



よる「ワーカーズコープ論」による寄付講座である。

2015年の沖縄大学を皮切りに、その後、沖縄国際大学、久留米大学、沖縄キリスト教学院大学、千葉大学、福島大学、和歌山大学、桃山学院大学、琉球大学と9大学に広がり、新年度は埼玉大学、新潟大学でも講座が開設される見込みだ

協同へ導く寄付講座 働く意味求める若者

という。

講座が急速に広がっていることにも関係するが、この「ワーカーズコープ論」に対する学生を含む大学側からのニーズが極めて強いということでもある。協同組合系統による講座の詳細について把握してはいないが、ほとんどは協同組合運動や組織についての理解を求める講義方式であると推測される。これに対して「ワーカーズコープ論」は、講義方式は一部で、現場実習やディスカッションに時間を重点的に配分しているところに特徴がある。講座が終了しての学生や教員の反応を見ると、講座に触発されるどころは極めて大きいように受け止められる。

講座が急速に広がって働き方改革が押し進められている。賃金水準や就業時間などの見直しも重要ではあるが、今、学生、若者たちが一番求めているのは働くことの意味・意義を見いだすところにある。多くの学生は「株式会社とは違う原理を持っている会社で働きたい」「働くことをまっすぐりに生かしたい」といった意向を持つようだ。

「ワーカーズコープ論」では、「大半の学生がアルバイトをしている現状を前提に、学生時代から地元や大学の存在する地域でワーカーズコープを立ち上げ、仕事おこし、まっすぐりを学び、協同収入を得ること」をいかに表現していくか、実践的なアプローチを試みる。

今、協同組合、農協の在り方が問われているが、協同労働や「ワーカーズコープ論」の切り口になり、一人一人が経営・運営に学ぶべきことは、労働も担う働き方の形である。目下、政府によ

(次回は2月6日付)

日本農業新聞 2019年1月30日(水)のきょうぶき 薦谷栄一さんの記事